田辺聖子の少女時代の作品：『伸びゆく者』を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中, 周子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4529

田辺聖子の少女時代の作品

～『伸びゆく者』を中心に～

中　周　子

はじめに

田辺聖子を、軽やかな大阪弁によるエッセイや恋愛小説の名手と見る向きは多い。また、古典文学に対する造詣の深さに基づいて執筆されたリライト本や古典エッセイ、さらに精密な調査・考証による評伝物も高く評価されている。エッセイや短編小説を加えると数百を超えると言われる田辺聖子の作品はまさに多種多彩である。それらの中に、いわゆる自伝風作品として括ることができる次の四作品がある。[1] 但し、本稿では①以外を自伝小説と呼ぶ。

① 『私の大阪八景』　昭和四〇年（一九六五）一一月、文藝春秋新社より刊行。五つの章より成る。

（一）～（四）の各初出は（一）昭和三六年一二月「のおと」第八号、（二）三七年九月「大阪文学」第九号、（三）昭和三八年七月「大阪文学」第一〇号、（四）昭和四〇年九月「文學界」第一九巻九号。

② 『欲しがりません勝つまでは―私の終戦まで―』昭和五二年（一九七七）四月、ポプラ社より刊行。

③ 『しんこ細工の猿や雉』昭和五九年（一九八四）四月、文藝春秋より刊行。

初出は『別冊文芸春秋』第一三九号～一四六号、昭和五二年三月～五三年一二月。

④ 『楽天少女通ります―私の履歴書―』平成一〇年（一九九八）四月、日本経済新聞社より刊行。

初出は平成九年五月、日本経済新聞に連載。

これらの自伝風作品において、たびたび少女時代に書いた作品が引用されている。例えば、『しんこ細工の猿や雉』は次のようなエピソードで始まる。[2]

私は女学生のころから、「本を書く」のを夢見ていた。これは作家になることとちがう。

大学ノートに、一篇の物語を書き、それに挿絵を描き、表紙を画用紙でくるんで水彩絵の具で彩色した絵を描き、好みの題を、内容にふさわしくつけ、そうして麗々と、

「田辺聖子作」

と書く、そういう「本ごっこ」「著者ごっこ」が好きなのである。

（いまでもどうかすると、「著者ごっこ」をしているのではないかと、私はフト疑ってしまう――自分のことはむろんだが、ひとさまの本でも、それがあまりに麗々しい題であったりすると、「著者ごっこ」的感覚に襲われて、気はずかしくなってしまう）

内容は、いずれも、愛読書に（無意識に）似せられている。私は荒唐無稽の小説を好んだから、私の「著者ごっこ」の「田辺聖子作」も、必然的に荒唐無稽な作品が多い。

たとえば題をみてもわかる。「古城の三姉妹」「春愁蒙古史」「白薔薇館の怪」「北京の秋の物語」……等々である。伝奇小説というべきものもかなり多い。

自伝小説を、出自や両親のことから書き始める方法もあろう。しかし、ここでは、「小説」を書いていた少女時代から始めている。どのような作品を書いていたかがわかる題名まで明記されている。作家田辺聖子の出発点が、少女時代の「著者ごっこ」であることを強く意識した書き方である。

『欲しがりません勝つまでは』も、「私は十三歳、女学校二年生である」[3]という一文で始まる。やはり、小説を書くことに熱中していた頃から書き始めている。しかも、興味深いことに、少女時代の作品を、前述した『春愁蒙古史』や『北京の秋の物語』を含めて、十一作品にわたって詳細に引用しつつ少女時代を描いているのである。

『私の大阪八景』は、「来年は女学校へはいらなければならない」[4]と、小学六年生の記事から始まるが、授業中に「天下一品のぼうけん小説!!」とノートに書いていたのを見つかり、先生に叱られるエピソードが書かれている。

『楽天少女通ります』[5]にも、「私は夢見る少女で、早くも物語を書きはじめ、級友に回覧して得意だった」と書かれている。十代にして、「私は書くことが面白くてしかたがない」（『欲しがりません勝つまでは』）と旺盛な創作意欲を持ち、早くも、クラスメートの中に熱心な読者を得ていたのである。

その頃の作品名が、複数の自伝小説に繰り返し書かれていることからも、「大いばりでさし出せる創作ではない」（『欲しがりません勝つまでは』）といいつつも、少女時代の作品に対する思い入れの強さが窺える。

ところで、作家が自伝に虚構を交えることは十分にあり得ることである。架空の書を小説のモチーフや材料に用いることを、創作の一方法とした前例も多い。では、これらの作品中の「女学校時代の小説」なるものは、すべて実在したのであろうか。また、実際に書かれた女学校時代の作品と、後年の自伝小説中に引用された作品の

内容や文章は、たがわないのであろうか。そのような疑問を抱かせるほど、自伝小説に引用された十代の作品群は面白い。

とまれ、田辺聖子の自伝小説には、本好きで自らも書くことに熱中していた少女時代が大きな意味をもって書かれている。本稿では、田辺聖子の自伝小説と、その作中に引用された少女時代の作品との関わりを読み解いてゆきたい。

一　自伝小説に引用された少女時代の作品

『欲しがりません勝つまでは』には、女学校二年の一三歳から書き始めた多くの作品が引用されている。しかも、各作品の内容についても詳しく書かれている。そこで、少女時代の作品群を概観するために、同書に引用された作品名および概要・冒頭の一節を列挙しておく。他の自伝小説にも引用されている場合は、その作品名も記した。

①『伸びゆく者』

昭和一六年、女学校二年の時の作品である。桜井志津という、女学校や教師に不満を持ち、死にあこがれる文学少女を主人公に、その他、ガリ勉の秀才・国木耀子、けなげな孝行娘・伊藤春子、裕福なお嬢様・奈町敬子等々「まるで色鉛筆のように一人ずつ、性格や環境のちがう」同年代の少女たちを描き分けた小説。少女たちの家族や、さまざまな教育方針の異なる教員も登場する。

この作品名は、『楽天少女通ります』にも登場する。「クラスメートをモデルに『伸びゆく者』というタイトルの小説など書いていたのは女学校二年生のことだが、四年生の目からみれば幼稚しごくだ」と書かれている。

②『或る少女の遺書』

『伸びゆく者』執筆中に書いた短編。すでに読者の興味を引く術を知っている。次のように、センセーショナルな一文で始まる。

「三谷小弓は十六で亡くなった。その母も父も弟や妹も、先生も友達も三谷家の女中たちもふしんでならなかった。なぜなら彼女は自殺したのである。」という書き出しで、「死」についての不思議をつきつめて、自殺した少女の遺書を中心に書いている。

③『海賊島』

昭和一七年、女学校二年の作品。宝探しに行って海賊に捕らえられた父親を助けに行く少年少女の冒険譚。「未完で終わってしまった」というが、気に入っていた作品のようで、「その題も、心躍る、『海賊島』というのである」とあり、さらに、『しんこ細工の猿や雉』にも、女子専門学校時代に会った編集者に作品を見せてほしいといわれ「さすがに『海賊島』やら『古城の三姉妹』などという荒唐無稽小説を出すことは憚られた」と記している。その冒頭は、次のように印象的なシーンで始まっている。

静かな夜である。皆は黙って盃ばかり口へ運んでいた。その中で一人賑やかなのは九鬼老人である。老人はきれいに禿げ上がった額を扇子で叩きながら謡曲をうたったり、君若丸の頭をなでたり、誰彼の差別なく話し出したりしていた。

あるじの芳麿という人は君若丸のお父さんで、公卿に似合わず武士気質の人だった。それで、この九鬼家に古くからつたわった黄金のかくし場所のある地図をもって、出かけることになったのである。彼は妻の尋槻にもそれを知らせなかったし、又、子の君若丸にも知らせなかった。ただ九鬼老人のほか二人ほどの友人に、それもごく内々に洩らしたのである。

④『春愁蒙古史』

昭和一七年、女学校三年から書き始めた作品で、一二、一三世紀の蒙古を舞台に活躍する英雄が主人公。学生ノートに一二冊以上もあった長大作で、各巻には、友愛の巻、風雲の巻、暗夜の巻、蒼天の巻など巻名がついている。「蒙々と砂塵のまきあがるゴビ砂漠、一望の平野、さえぎるものもない、内地では想像もできない地平線などを空想した。たぶん、そういうものへのあこがれと、『三国志』をまねてみたくなって『春愁蒙古史』を書き出した」とあるが、この作品も「未完」に終わったという。『しんこ細工の猿や雉』にも題名が書かれている。

⑤『炎の曲』他、戯曲も書いていたようである。

⑥『少女草』第1号〜3号

昭和一七年一二月から一八年一月。女学校三年生のクラスメートと編集した回覧雑誌。表紙の絵、巻頭言や短歌、詩、連載小説、古典鑑賞、修養の言葉等々、多彩な内容で、級友の作品も載るが、大半は田辺聖子が執筆している。

⑦『光りと共に』

昭和一八年、女学校四年生の作品。当時の友邦ドイツを讃歌した作品。ドイツ士官がスパイになってイギリスの要塞島に忍び込み、敵の機密を探り任務を果たすという大活劇。潜水艦の性能も調べた上で次のような戦闘シーンが描かれている。

息詰まる一瞬 —— 一秒、二秒、三秒……どかあん！と一大音響がした。

「命中！万歳」

乗員は思わず歓呼の叫びをあげた。つづいて第二、第三の魚雷。

「急速浮上！」

シェール大尉（註・潜水艦長である）の声が朗らかにわたる。（註・ひびきわたる、のことであろう）忽ち艦は悠々浮き上ると、黒煙を噴いて、急角度に沈みゆく艦—敵艇—を尻目に走り出した。（中略）

波は依然として荒かった。北海の星は美しくまたたき、風は冷たかったが、○○北海基地島は近くなったのであろう、味方の夜間哨戒機が飛んでいた。

⑧『花蘭物語』

昭和一九年、女学校時代最後の作品。中国を舞台に革命軍の兵士となり国民軍と戦う花蘭を主人公とする物語。早朝、父親が赤ん坊（後の花蘭）を捨て子して逃げる時に乗る馬車を描写する冒頭シーンは見事である。

深い霧の朝であった。馬車屋の張は御者台の上で始終ガタガタ震えていた。かじかんでいる、大きい、いかつい手に白い息

をはきかけ、一しきり鞭をあげて、馬をおどかした。
「しっ、しっ」
街はまだ深い眠りに落ちているらしかった。霧は白々と木々を包み、家々の瓦を濡らし、太陽の光を遮ろうとでもするかのように、しっとりと町に立ちこめていた。ものの二十メートル先も視野が全然きかない。張は用心ぶかく、鈴を鳴らしながら、ガタガタと馬車を進ませた。

⑨『北京の秋の物語』

昭和一九年、女子専門学校時代、最初の作品。上中下の三巻。中国を舞台にした内容にちなむ表紙の絵（中国の邸と庭園）も描いている。アメリカと日本で学んだ若者、排日派の青年、軍人など、新政中国の若者群像を描こうとした作品。冒頭の会話文による自然描写は巧妙で美しい。

「北京の秋は短いね」
「そう、やっと暑さが去ったと思ったら、すこし涼しくなる。すると落ち葉だ。空が澄む。空気が冷える。段々にさむくなる。雪が降る、もう冬だ。それほど短い。しかし、短いなりに、美しいのだ。人の心をしっかりつかむ美しさを残して、秋は逝くのだ。ねえ、趙君、美しくて短いものは、よけいに惜しまれるものだね」

⑩『最後の一人まで』

昭和二〇年、女子専門学校の二年生の頃、学徒動員の伊丹郡是工場の寮にて書いた小説。架空の国（アンガマダ王国）の若きリーダーが、敵国アメリカに対して、最後まで戦い抜こうとする国民を率いる姿を描く。最後は国民全部、悲壮な死をとげる話。『楽天少女通ります』にも「工場の寄宿舎でひとり、軍国主義的な小説を書き綴っていた」、「『最後の一人まで』という長編小説だった」と書かれている。

⑪『エスガイの子』

昭和二〇年、「もう、町には文房具屋も店をあけていなくて、ノートを買うことはできない。たまたま私の親類に、青写真を扱う仕事をしている人がいて、メモにするがいいといって、青い設計図みたいなものの裏を綴じたのをくれた」ので、その裏紙を利用して書いた作品だという。戦時下に、学徒動員の工場の寮で、書くことに熱中していた少女時代の田辺聖子の姿が彷彿する。舞台は蒙古。エスガイはモンゴル部の首長で、その子はテムジン、後のジンギスカンである。自身も「『春愁蒙古史』よりは文章も、われながら格段に進歩している」と評価しているごとく、冒頭のみを読んでも、すでに読者を惹きつける表現力を獲得していることが窺われる。

「オイ、おっ母あは居るか」
荒っぽい濁声に続いて、ぬっと大きい男がはいって来た。
夏のはじめ……ここ、オノン河の支流には、雲のゆききが劇しく、河はとどろと渦まいて流れている。断崖の上に突立ったあばら小屋は、今にも倒れそうに、風雨に朽ち傾いている。包（パオ）をつくる材料さえないらしく、板片れを並べたに過ぎぬ掘立て小屋である。

これらの作品の内、⑤を除くすべてが（一部の破損、巻の欠落もあるが）文学館に寄託資料として保管されている。少女がノートに書いた作品が、第二次世界大戦の時代、ことに大阪大空襲を経て現在に残っていることは、まったく僥倖と言う他はない。奇しくも作品が残った経緯については、複数のエッセイに書かれているが、『欲しがりません勝つまでは』によれば、次のような事情であった。

三十年前に書いた小説が手もとに残ったのは、全く偶然のことである。昭和二十年六月一日の空襲のとき、私は登校していて家にはいなかった。家に焼夷弾が落ちはじめたとき、家族はとっさにいちばん手近にある鞄だけを外へほうり投げて持ち出してくれた。その鞄のなかに、私は、女学校時代に書きためた小説を詰めていたのだった。

それにしても、自らの属する世界を描くリアルな作品から、想像を膨らませた伝奇小説や冒険小説、日本や中国を舞台にした歴史小説、戯曲等々、多彩な内容が目を引く。しかも、それらを、内容に見合う多彩な文体で書き分けていて、舞台も日本に留まらず、中国やドイツ、イギリスにわたっている。少女時代の旺盛な創作意欲には驚くばかりである。

二　はじめての小説『伸びゆく者』の引用

『欲しがりません勝つまでは』に引用されている女学校時代の小説の中で、最初に紹介されるのが、『伸びゆく者』である。まず、次のように記されている。

無地の小さなノートに、入学のお祝いに買ってもらった万年筆で、こくめいに描いている。いま書いてるのは、『伸びゆく者』という題をつけてある。むろん、女学校生活が題材になってるのである。出てくる登場人物は、クラスメートを題材にしたものもあるが、そうでないものもある。

十代に書いていた他の伝奇小説や空想小説の中で、唯一、女学校と家庭を舞台にした、家族、教師、友人が登場する、自らの日常の延長上の世界を描く作品であることが注目される。もちろん、多少の虚構を交えている可能性もあろう。しかし、少女時代の只中で、少女時代を描いた作品である点が重要になってこよう。後年の田辺聖子が少女時代の世界を描く自伝小説の中に、当時、少女であった田辺聖子自身が描く身辺小説が、入れ子構造のようにはめ込まれている点は、考察に値すると考えられるからである。

まずは、『欲しがりません勝つまでは』の本文中に、『伸びゆく者』がどのように用いられているかについて、見てゆくことにする。

【引用①】女学校の休み時間に小説を書いている場面に、『伸びゆく者』が引用される。作品の内容は、女学校と教師への不満、志津の心の内である。その冒頭は、同世代の少女たちに率直に訴えかける一文に始まっている。

①―1　教師への不満

桜井志津が組担任の小山先生を嫌う理由は二つあった。それは

（一）小山先生があまり若くて、先生としての威厳がどうして

も具わらず、又、生徒をよく叱るのは畢竟、経験が浅いということと、

（二）経験がなければ他のクラスの先生方を見習って頂いて、このクラスを小説にあったような美しいクラスにしたいと思うことであった。

学校生活が楽しいものになるか苦しいものになるかは、ひとえに担任や教師にかかっている。一三歳の少女の最大関心事は担任教師であった。主人公・志津の担任評はかなり手厳しく、この後に、生徒を呼びつけて叱りつける出来事が書かれ、もう一人、よく生徒を泣かす体操教師も登場させている。続けて志津の心境が描かれる箇所が引用される。志津という主人公は、早熟な「死」への関心をもつ文学少女として形象されている。

①―2　「死」への思い

志津は今、講堂の裏にいる。

教室はさわがしくて暑いのである。もうじき近づいてくる夏休みを考えていた。青空はすみ渡ってふるえるようであった。志津は青空をみていると、泣きたくさえなってきた。

それはセンチメンタルな弱々しいものでもなければ、現実の世界のくるしさに堪えられなくなったからでもなかった。

（生きていて何になろう！）という疑いであった。しまいに死にたくさえなっていた……。

この引用の後に現実世界が描かれる。突然、友人が「見せて！何書いてんの」と、登場する。「うわ。こんな先生のワルクチ書いて、見つかったらどうすんの」、「あんた、死にたいの」と、心配する友人に対して「私」は、こう答えている。

「そこが、小説ですよ、小説。だけど、友田さんいっぺんも、そんな気になったこと、ない？死んだらどうなるやろ、とか、死ぬ、てどうなることやろか、とか」

現実的な女学生の会話から、「死」は、小説のテーマとしての興味であることが語られる。そして、再び、「私」は書き始めるのである。

①―3　「英雄崇拝者」

大人になって後も、平々凡々と家庭の主婦で暮らすのはいやになっていた。志津は熱心な「英雄崇拝者」であった。特に女子の身で国を救ったジャンヌ・ダルクを始めて雑誌で知った時、胸がときめいて一週間ほど一人で昂奮していた…。

引用される作品世界は、しばしば友人の言葉で遮られて現実に戻る。「ふーん。よう、そない、スラスラと書けるねえ」と、尊敬の念で見つめる友人を傍らに置いて、「私は書くことが面白くてしかたがない」という。目立たない「女学生の心の底には、いろんなごっちゃな考えが渦巻いている。それらが脈絡もなしに、ノートに書きつけられてゆく」というのである。

①―4　国語の授業への不満

志津は女学校の先生には失望してしまった。とくに小山先生には志津は愛想をつかした。先生は国語の担任であるが、先生に教えてもらう国語はちっとも面白くない。

それからいうと、教科書さえ、幼稚である。

小山先生の教えぶりは、こういうものである。

「ええっと――。まあ、こんなとこ、わかってますやろ。あ、溪と谷と説明しておきますが、溪とは水のある山と山との底のことで谷という字ィは、水のない底、山と山との底いう意味です。わかりましたか。は、小野さん、もういっぺんいうてごらん」

こんなことばかり一時間いわれると、いやになってしまう。辞書を見れば書いてあることを、わざわざ口でいう。全く僭越ながら、こういう教えぶりでは、志津にも教えることができそうだった。

授業への不満が書かれるのだが、教師の大阪弁の口調を巧みに文章にしていて、その声が聞こえてくるようである。後年の大阪弁を駆使した会話文の表記、小さなカタカナの使用が、すでに、一三歳の小説において見られることは興味深い。

この引用箇所に続く、自伝小説の本文では、「しかし私は、小山先生は、気どりがなくて好きなのだった」と書いている。「大阪弁というのは、いばったっていばったようにきこえない。小山先生をじーっと観察している眼は、意地わるなようだが、つまり、私にとって、国語の小山先生は、それだけ、印象的なのである」と。引用作品中の辛辣な少女時代の先生評は、そのままが現実ではなかったと補筆している。主人公の志津は「少女小説にあるような期待をもって」、「空想と現実を、ごたまぜにしている」ために、現実の教師や学校への不満が募るのだと分析している。

自伝小説の話者は、表向きは女学生の「私」だが、明らかに、後年の視点で語られているし、時々作者が顔をだして括弧を付けて注釈を施す体裁をとることもある。

【引用②】志津の家庭と生い立ちを描く中に、本好きであったこと、「小学生のときから活字中毒で、新聞でも菓子屋の広告でも、活字さえあれば読んでいた」と書かれる。「字」と「ことば」に関して、例えば、「御幣帛料」や「御令閨様」など、小学生とは思えない大人顔負けの知識を持っていたエピソードが語られる。そして、「家でも学校でも、私は小説（と、自分で信じているものを）書いている」、「根も葉もない空想でも、（空想だからなお）スラスラと書けるのである」と、自宅で小説の続きを書くのである。

②―1　伊藤春子　けなげな親孝行娘

家には父親がなくなって後、急に体の弱くなった母親と祖母と幼い弟妹がいる。早くかえってねえやの手伝いをしなければいけない…。

伊藤春子の深更におよぶ忙しい日常生活、家業の手伝いや病気の母親の看病、祖母や幼い弟妹の世話等々を描き終わって、「私」は「ペンをおき、おやつのビスコをかじって読み返す」。「けなげに生きている孝行娘のことを書いたあとで、舞台を一変させなければならぬと思い、私はべつの主人公をもち出してくる」のである。

②―2　奈町敬子　裕福なお嬢様

奈町敬子は身軽に電車を飛びおりる。すっきりと腰のしまっ

たスマートな制服、その胸には雪の峰の如く輝く白レースの絹手巾をさっそうとかざっていささか得意そうだった。

裕福でハイカラな女学生、やや不良のお嬢さんを描いている。伊藤春子とは環境のまったく異なる女学生である。しかし、「父は相かわらず不在だし、母は持前のヒステリー」という幸福とはいえない家庭を描いている。他にも、次の二人についての引用があるが、省略する。

②―3　吉川すみ子　赤十字の看護婦志望、志津の野心との対比、志津を理解し敬意をもっている友人

②―4　国木耀子　ガリ勉の秀才、

このように、いろいろな級友を登場させているが、その中には「実をいうと、友田サンも『吉川すみ子』という名で出てくる」と書いている。虚構を交えつつも、実際の女学校生活を描いていることを種明かししている。そして、②―3で、吉川すみ子と志津の会話が引用されるが、これも実際の会話だったかも知れないと思わせる効果がある。

また、『伸びゆく者』の執筆中に、『或る少女の遺書』を書いたと語り、その作品をほぼ全文引用している。「死」に対する興味が書かしめた作品である。

【引用③】『或る少女の遺書』の引用。

十六歳で自殺した真弓の遺書。その理由は「死」の不思議を追及するという観念的なものであった。その作品の暗さを補うように、「十三の少女は夢中になって陶酔して書いてるのである」という後年の読後感を記し、作品内でも、次のような滑稽な場面が対置されている。

こういうことを書いていて、下から妹のマチコが、

「姉ちゃん、ご飯！」

と呼ぶと、私は、

「何やのん、今晩のオカズ！」

と階段の上から叫ぶ。

「洋食！」

「うわ。うれし！」

私はドドド…と百雷がいっぺんに落ちるような音をたてて、階段をかけ下り、

「これッ！」

と母に叱られる。

そして、「『遺書』なんか書いているけれども、私は現実には死ぬ気なんか、ちっともなく、洋食の日を心待ちに生きてる」と、作品世界と現実の少女時代を対比しているのである。

自伝小説に、少女時代の作品を引用していると言う事実は、それらの作品への愛着のなせる業だったと考えられる。しかし、『伸び行く者』に関しては、女学校時代の作品によって自らの少女時代を描くという方法を意識していたのではないだろうか。創作上の一方法として自伝小説に奥行きを与える効果を意図したと考えられる。

次に、「ノート」の内容の検討を通して、後年の自伝小説に引用された『伸びゆく者』と、女学校当時に書かれた『伸びゆく者』と

の世界は、いかに関わりいかに相違するかについて考察する。

三　田辺聖子自筆「ノート」に書かれた『伸びゆく者』

『伸びゆく者』が書かれた「ノート」[6]は、縦一八・五センチ、横一三・三センチ大である。ウサギを抱く少女と弟のような男の子が描かれた美しいカラーの表紙（写真①参照）に、「SEIKO TANABE」とペン書きされている。『欲しがりません勝つまでは』に「無地の小さなノートに、入学のお祝いに買ってもらった万年筆で、こくめいに書いている」とある通り、実際、ノートに罫線はなく、「万年筆」で書かれており、前節でみてきた引用の文章とも、ほとんど一致する。途中に『或る少女の遺書』が書かれている点についても一致する。（写真②参照）このノートが、『欲しがりません勝つまでは』他の自伝小説の資料になったことは間違いない。ただし、残念ながら、閉じ糸が切れたり破損している箇所もあって、途中の数頁が欠損し、最後も破損している。

両者が一致していることについて確認するために、『欲しがりません勝つまでは』が引用する冒頭部分を再掲して、ノートに書かれた『伸びゆく者』本文と対照しておこう。

■『欲しがりません勝つまでは』引用本文

桜井志津が組担任の小山先生を嫌う理由は二つあった。それは

（一）小山先生があまり若くて、先生としての威厳がどうしても具わらず、又、生徒をよく叱るのは畢竟、経験が浅いということと、

（二）経験がなければ他のクラスの先生方を見習って頂いて、このクラスを小説にあったような美しいクラスにしたいと思うことであった。

■ノートの『伸びゆく者』本文（以下、「ノート」と略す）

櫻井志津が組担任の小山先生を嫌ふ理由はふたつあつた。それは（一）小山先生があまり若くて、先生としての威厳がどうしても具はらず、又、生徒をよく叱るのは畢竟經驗が淺いといふことゝ、（二）經驗がなければ他のクラスの先生方を見習つて頂いて此のクラスを小説にあつたやうな美しいクラスにしたいと思ふことであつた。

冒頭部分を比較すると、ごくわずかな相違、改行や旧仮名遣い、旧漢字の相違が見いだせる程度である。『欲しがりません勝つまでに』の「昔のことだから、略字ではなくて、むつかしい本字を使って書いている。それに、旧仮名で書いてあるから、現代の若い人には読み辛いだろう。いまの字に直し、新仮名遣いにあらためてみよう」という記述にも合致する。また、書かれている文字についても、「まだととのっていない字で、あっちを向いたり、こっちを向いたり、アヒルがでこぼこに行列しているという感じで、ドガヒョガした字をならべている」と、文字の大きさが定まらず、大小不ぞろいの文字で書かれている様子を言い得て妙である。（写真②参照）

『伸びゆく者』から『欲しがりません勝つまでは』が引用してい

る内容と分量を、「ノート」と比較しておこう。（　）内の「文庫」は、ポプラ社文庫本の頁・行数（一頁は三七字一六行）、「ノート」は文学館所蔵の資料の頁・行数（手書きで行数が一定しないため概算）である。

①冒頭部分、主人公志津の担任（国語）と体操教師への不満、志津の思い「死」への疑問と「野心」（「文庫」二頁五行、「ノート」二頁四行）

②女学校への失望、国語の授業への不満（「文庫」二頁三行、「ノート」二頁四行）

③級友・伊藤春子の話（「文庫」二頁、「ノート」約二頁）

④級友・奈町敬子の話（「文庫」二頁三行、「ノート」二頁五行）

⑤志津と友人吉川すみ子との会話、将来の夢、二人の友情（「文庫」一頁三行、「ノート」約一頁）

⑥國木耀子の話（「文庫」一行、「ノート」一行）

以上の六箇所に「ノート」が引用されているが、すべて「ノート」の前半部分「その一」からの引用である。後半部分は破損しているためであったと思われる。「ノート」では、女学校での出来事と、志津を含む級友たち七人の放課後、家庭での生活が描かれており、後者には「七つの家庭」との小見出しがつけられている。その中から、志津、すみ子、春子、敬子の話を選んでいる。主人公を理解者である親友を通して描き、そして、対照的な境遇を描き分けている点をよしとして引用したのであろう。

四　共通の題材と表現の相違

『伸びゆく者』中に描かれている出来事や会話が『欲しがりません勝つまでは』にも描かれる場合がある。引用ではなく、題材・場面の共通性を指摘しうる箇所である。考えて見れば、両作品とも女学校時代という同じ題材を描いているのであるから、当然のことともいえるかもしれない。しかし、興味深いのは、そのような個所を読み比べてみると両者の視点と文章の相違が存することである。例えば次のような相違である。

①放課後、女学校の裏庭の樹を見ての会話

■『欲しがりません勝つまでは』

講堂の裏手は、カシや青桐の木が植わっていて、その幹には、卒業生が彫っていった文字がある。それをよむのはおもしろかった。

「夢多き学舎をいでたつ日に。もと子さま」

「友情」

「純情」

などという言葉もある。私たちは一つみつけると、

「キャア。これ見てみ」

といって、友達をよんで見せ合う。夾竹桃の花が、暑くるしそうにボテボテと咲いていて、その樹のために、このへん、ちょっと別世界のようにかこまれているのだ。

同じ場所は、「ノート」第一部の最後に描かれている。志津が休み時間に、級友と学校の裏へ行く場面である。文末に「(未完)」と記されている。

■「ノート」

木の目の堅い樹木の後へまはると、卒業生が彫つて行つた文句がある。「夢多き学舎を出でたつ！」とか「堀口佐代子」「江崎政女」とかいふ名前が彫つてある。餘程念を入れて彫つたものと見えてきれいにほつてある。「友情」とか「純情」とかいふ言葉も見られる。二人は顔を見合はせてわらつた。丁度講堂の裏手の方に桃色の夾竹桃の花が咲いてゐる。

秋になりそめた風は冷い。(未完)

「ノート」では第一部を締めくくる場面にふさわしく、「女学生」のイメージを提示する美しい描写であるのだが、後年の自伝小説では感傷的に流れがちな少女趣味を排そうとしたのであろう。読み比べて見ると、『欲しがりません勝つまでは』では闊達な文体で大阪の女学生を描こうという意図で書かれている。

さらに、次の旧友と会話する場面も、同じ話題ながら、「ノート」とは異なる筆致で描かれている。

② 級友・友田サンとの会話

■『欲しがりません勝つまでは』

友田サンは、また、私の書いた分を読んで、

「ほんまに文才あるわ。小説家になりなさいよ」

とすすめた。

「ナベちゃん、いつみても書いたり、本よんだりしてるもん」

「あたし、トラピストに入るかもしれへん」

それも私の夢である。

「自殺にあこがれるけど、死ぬよりトラピストに入る方がいいわね」

「なんで」

「トラピストへ入ったら、生きてても死んでるのと同じよ」

「それはそうやけど、あたしはやっぱり、死ぬのはいややわ」

「トラピストは少しもモノをいわないんですって。それで火事があったときも、みんなひとこともいわず消したって」

「わたしみたいなオシャベリは地獄やな」

■「ノート」

トラピスト。トラピスト。修道女。

志津の頭に「死」という考えが顔をだすと、きまってトラピストが頭をもたげ始める。それは、何という悲しい響であろうか。吉川すみ子と志津はトラピストのことを話すと、いつまで経ってもつきなかつた。志津の思想はかうである。

「死ぬよりもトラピストに入る方がいいわね。」

「なぜ。」

『欲しがりません勝つまでは』では唐突に話題が変っているが、「ノート」では「トラピスト」の一行から、新たな場面となり二人の会話が始まるのである。「ノート」においては、「志津の思想」を語る重要な場面である。この次の頁が破損しているのが残念である

が、この個所では二人の会話に大阪弁がほとんど使われていないことが目を引く。自伝小説が改変した箇所を比較しておこう。

・「なぜ。」→「なんで」と改変。

・「それはさうだけど……」すみ子は矢張り「死ぬのはいやだわ。あたしなら。」といった。→「それはそうやけど、わたしはやっぱり、死ぬのはいややわ」と改変。

・「あゝあ、地獄やないの」→「わたしみたいなオシャベリは地獄やな」と改変。

「ノート」においても小山先生の授業の描写では巧みに駆使されていた「大阪弁」が、少女たちの会話では影を潜めている。カトリック教会の厳格な修道生活を行う「トラピスト」にあこがれを抱き話題にする女学生たちの意識のあらわれのようでもある。「ノート」に登場する女学生たちは、あまり大阪弁をつかわない。自伝小説においては一様に大阪弁を使わせるという改変は当然のことであろう。

この場面を「ノート」の引用ではなく、会話の一部として描いているのは、「ノート」が描く少女時代の偏狭な思い込みを払拭しようとしたからだと考えられよう。

他にも、両者に類似する事件が描かれている。あこがれの先輩が教員に叩かれると言うショッキングな出来事である。「ノート」では、学校中で一番好きな先輩の船本サンが日記に教員を「人間の屑」だと書いたのが見つかり、叩かれて鼻血をながして倒れたと言う事件である。『欲しがりません勝つまでは』では、憧れの先輩吉田サンが、持ち物検査をする教員に反抗し、「人間の屑」と日記に書き、やはり見つかって撲られて鼻血を流したと描かれる。「私」は、「こわい先生に対等にモノをいえる吉田サンをすっかり尊敬してしまった」とあり、「みんな勇敢な吉田サンに、すっかり感心してしまった」というように、吉田サンは女学生たちのあこがれの存在として描かれる。この吉田サンが「ノート」の船本サンと同一人物かどうかの確証はない。ただ、「ノート」では、船本さんに対する当時の女学生たちの反応はやや違っていた。志津も事件を聞いて驚き興奮するのであるが、「好きな船本さんに対する信頼を裏切られて気を悪くした」とも書いている。伊藤春子は「船本さんも悪いと思うわ」という。教師や学校に対する不満を書き連ねている志津だが、教師を「人間の屑」と書くことは「不良分子」の仕業と考える女学生の常識から自由ではなかったのであろう。因みに憧れの上級生・船本さんは、『私の大阪八景』（『陛下と豆の木』）にも登場するが、事件については全く描かれない。

自伝小説と「ノート」が、同じ時代を描くとはいえ、三〇年を経ている。描く観点に差異が生じて当然である。『或る少女の遺書』の引用の仕方、作品内における位置付け方からも同様のことが言える。

五　『伸びゆく者』と『或る少女の遺書』との関係

「ノート」には、『伸びゆく者』の「その一」（約二五頁）と「そ

の二」（約二五頁以上）の間に、『或る少女の遺書』（約五頁）が書かれている。（写真②参照）

『欲しがりません勝つまでは』の本文中にも、短いこともあってか『或る少女の遺書』は、ほとんど全文が引用されている。そして、突然に、他の作品を書き始めた理由については、「何という乙女心のふしぎか」と説明してはいない。気まぐれな書きぶりが強調されている。さらに、「遺書」や「死」についても、「べつに自殺しなければならないほどの悩みがあるわけではないが、若くして命を断つ、ということのいさぎよさにあこがれているのである」と書き、前述した如く「『遺書』なんか書いているけれども、私は現実には死ぬ気なんか、ちっともなく、洋食の日を心待ちに生きてる」と、小説と現実との食い違いが、滑稽味を加味して描き出されている。

ところが、「ノート」の『或る少女の遺書』の前と後に、四角く囲った中に書かれている次の断り書きを読むとき、両作品が、執筆当時においては、決して気まぐれから書かれたものではなかったようである。

少しこの辺で『伸びゆく者』の筆をとめます。しかしこのままでは未完ですし、伸びゆく少女の心のうごきや外からの敏感な心の働きをもつと描いてみたいとおもひます。しかし、この小説は少し止めて、筆を改めて書きます。

（『或る少女の遺書』が入る）

これで、志津の性格がみなさんには少しおわかりになったことおもひます。三谷小弓と志津とは死に対する思想が同じだとお思ひ下さい。引續き致します。

この断り書きを読む限り、二作品は無関係ではないという意図のもとに書かれていることがわかる。三谷小弓の「遺書」は、『伸びゆく者』の主人公志津の「敏感な心の働き」や「思想」を補完する意味で書かれたと考えられるのである。破損があるとはいえ、現存「ノート」を読むとき、「死」というテーマを追究しようと試みた痕跡が見出せる。

「死」は、すべての人間が体験するものでありながら、解決不可能な問題であり、「死」に無関心な人間はまれであろう。現に、「死」は古今東西の文学における重要なテーマの一つでありつづけている。少女時代の作品『伸びゆく者』には、早くも人間の根源的な問題である「死」というテーマに対峙する田辺聖子の姿が見出せるのである。

「（生きていて何になろう！）という疑いであった。しまいに死にたくさえなっていった。」と、志津は折々に「死」を意識している。志津の頭には「死」に対する観念的な思想が時折浮かんでくる。修身の授業で武士が刀で人を切り、切腹すること等を挙げて、日本は命をすぐ捨てる「野蛮国」だと説く教師に怒りをあらわにしている。また、事件として級友春子の母親の死と葬儀が描かれている。さらに、「死」を出来事として描くのみならず、「母親の死」という題材で、作文の時間に春子と志津のふたりが書いた文章を対比するのである。事実であったのか、虚構が混じっているのか、知る由もないが、「書くこと」のテーマとしての「死」に、強い関心をもってい

たことは、確かであろう。

三谷小弓を志津の分身として、志津の「死」にあこがれる心の動きを、自殺してしまった小弓の「遺書」という形式で書きたいという衝動にかられて、二つの作品は書かれたのではなかったろうか。小弓の自死の理由は、「私は『死』といふものを考へて考へて考へぬいて苦んで苦んで苦みぬいた結果」だという。「假面をとつた私の顔は、いつも明るい朗らかな假面とはまるきり違つた陰気な陰險な死ばかり考へてゐる生徒だつたのです」と告白する小弓は、幼い子供の死に遭遇して一層「死」の不思議に囚われてゆく。しかし、「遺書」はこう結ばれている。「誰に分らなくてもよいのです。…（中略）…結句、私は遺書等止めた方が好かつたのです。なまじひ人々に私の死んだ原因を知らさうとしたのが悪かつたのです」と。説明のつかないまま、説明を放棄した形で「遺書」は書き終えられている。

少女時代の最大関心事として、「ノート」には繰り返し描かれていた「死」というテーマであったが、早熟な志津にも「死」は解明不可能な難題であった。自伝小説においては、両作品の関係性を、「死」というテーマの追究を、少女時代の不徹底な追究として払拭したと考えられる。

おわりに

以上、見てきたように、田辺聖子の自伝小説においては、必ずと言ってよいほど少女時代の創作活動が描かれていた。ことに『欲しがりません勝つまでは』には、十代に書かれた作品が多く引用されている。後に創作されたものか思われるほどの完成度の高い作品も少なくない。最初の小説とされる『伸び行く者』は、自伝小説で度々描かれている女学校時代を、女学生の田辺聖子が描いた作品である。そこで『伸びゆく者』が、相当頁にわたって引用されつつ、女学校の日常が描かれていることに注目して、「ノート」そのものと『欲しがりません勝つまでは』との比較考察を行った。その結果、小説の世界と現実の世界を行きつ戻りつする「夢見ごこち」の少女時代を描く手法として、「ノート」の引用が効果的に機能していることが分かった。後年の自伝小説においては切り捨てられた「死」を巡る考察や描写も見出せるなど、作家田辺聖子の原点を探る意味でも「ノート」の存在は重要である。

「ノート」には、長じて小説家になったならば、「女学校生活を畫いた今迄の小説のあまりに架空的であるのをあばいてやらう」という、志津の野心も描かれている。幼少から古典好きだった田辺聖子のこと、宮仕えをすることもなかった道綱母が、「世の中におほかる古物語の端などを見れば、世におほかるそらごとだにあり」[7]といい、空事ならぬ自らの身の上を『蜻蛉日記』として書き残したことを知っていたであろう。そして、文学史上に「女流日記」を確立した気概に共感していたであろうことも想像に難くない。

「志津の野心」が見事にかなったことを作中の志津に語るべく、田辺聖子は『伸びゆく者』を後年の自伝小説に引用したに違いない。

『伸びゆく者』をはじめとする少女時代の作品は、作家田辺聖子の原点を見出しうる興味の尽きない作品群なのである。

（注）

（1）各作品の初出は、浦西和彦著『田辺聖子書誌』（和泉書院、一九九五年刊）と『田辺聖子全集　別巻1』（集英社、二〇〇六年刊）に所収の「初出一覧」による。

（2）『田辺聖子全集1』（集英社、二〇〇四年刊）所収の本文による。以下の引用も同書による。

（3）『欲しがりません勝つまでは』（ポプラ社、二〇〇九年）所収の本文による。以下の引用も同書による。

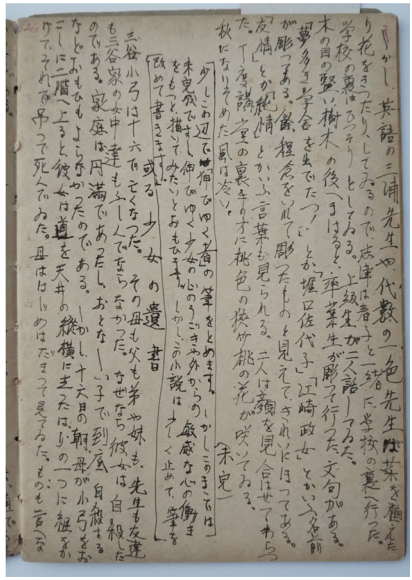
（4）『田辺聖子全集1』（集英社、二〇〇四年刊）所収の本文による。以下の引用も同書による。

（5）『楽天少女通ります』（角川春樹事務所、二〇〇七年）所収の本文による。以下の引用も同書による。

（6）田辺聖子文学館に田辺聖子氏から寄託された資料である。

（7）『蜻蛉日記』（新潮日本古典文学集成、昭和五七年刊）の本文による。

写真①　ノートの表紙



写真②　ノートの頁